様式 C-7-2

自己評価報告書

平成２３年　４月１８日現在

機関番号：１３１０１
研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2008～2011
課題番号：２０５２０２８１
研究課題名（和文）　１９世紀後半から２０世紀初めのロシアにおける身体と表象の関係の構造転換
研究課題名（英文）　The Structural transformation of the body and representation in late nineteenth- and early twentieth-century Russia
研究代表者
番場　俊（BAMBA SATOSHI）
新潟大学・人文社会・教育科学系・准教授
研究者番号：９０３０３０９９

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：文学・ヨーロッパ文学（英文学を除く）
キーワード：ロシア東欧文学

１．研究計画の概要

本研究は、19 世紀後半から 20 世紀初めのロシアにおけるいくつかの文化的・社会的実践をとりあげ、身体と表象の関係のあり方が世紀転換期を境に大きく変化したことを検証するために、芸術、法、心理学の境界領域に学際的なアプローチを試みるものである。分析を進めるにあたっては、身体は文化の外部に想定される与件ではなく、逆に、芸術／権力／知／メディアなどの諸実践のただなかで構成され、変形されるものであるというフーコー的な方法論的仮説に立ち、芸術（告白文学の変化、抽象絵画の誕生）、法（刑事訴訟法における自白と証言をめぐる諸手続きの変化）、心理学（証言の信憑性に関する心理学的研究、視覚の生理学）の境界領域に学際的なアプローチを試みる。

具体的な課題は以下の通りである。

(1) 19 世紀後半における「告白＝自白 confession」の文化的・法的地位の変化を明らかにすること。

(2) 身体をめぐる諸科学（心理学・生理学・反射学ほか）が、ドストエフスキーをはじめとする 19 世紀文学や、マレーヴィチをはじめとする 20 世紀芸術と結ぶ関係を考察すること。

(3) 身体と表象の関係に関する理論的著作の批判的検討をおこなうこと。

２．研究の進捗状況

上記課題(1)については、ドストエフスキーのいくつかのテクストの分析を、1864 年前後の司法制度改革における「自白」の地位の変化や、19 世紀正教史における告白（痛悔機密）のあり方とつきあわせて検討する試みをおこなった。その結果、明らかになったことは、①19 世紀後半における文学的告白の前史としての『白夜』（1848 年）の境界的な位置、②『地下室の手記』（1864 年）から『罪と罰』（1866 年）にいたるドストエフスキーの「告白小説」のプランの変更の意味、③従来、「予審判事」という不適切な訳語があてられてきた『罪と罰』（1866 年）の捜査担当官ポルフィーリー・ペトローヴィチの歴史的な意義と、それが作品においてもつメタフィクショナルな役割などである。

課題(2)については、①ドストエフスキーの『カラマーゾフの兄弟』（1879-1880 年）および『作家の日記』（1873、1876-1881 年）をとりあげ、とりわけ『作家の日記』1876 年 10 月～12 月号に集中的に現れる女性の身体というテーマ（継子殺害未遂事件の容疑者コルニーロヴァのアフェクトの身体、ゲルツェンの娘およびモスクワのお針子ボリーソヴァの自殺者の身体、短編小説「おとなしい女」の女主人公の身体）に注目し、身体が文学的・医学的・法的言説が交差する争点となっていたことを明らかにした。②また、ドストエフスキーにおける写真／絵画と言語テクストの関係について検討することで、マレーヴィチをはじめとする 20 世紀初めのロシア・アヴァンギャルドに対するドストエフスキーの距離を考察した。

課題(3)については、フロイトとデリダ（「事後性」の概念）、バフチン（小説の「現在」性、カーニヴァル的時空間）、ヤンポリスキー（「近接性」と「盲目の視点」）、木村敏（自己と時間の関係の類型論）などの理論的著作を検討することで、ドストエフスキーの小説にみられる特異な時間感覚を明らかにする手がかりを得つつある。

３．現在までの達成度
③やや遅れている
（理由）
当初の研究計画では、上記研究課題(2)にあるように、20 世紀の事象にも相応の比重を置き、芸術論と心理学が併走しながら精神の「身体化」と「外化」に向かっていったさまを分析する予定であった。しかし、課題(1)の検討（ドストエフスキーをはじめとする 19 世紀後半の小説における、身体と言説と社会的諸制度の関係の分析）、および課題(1)を裏打ちする課題(3)の理論的検討に予想以上の時間を取られたために、マレーヴィチの芸術理論、ヴィゴツキーの心理学、パヴロフの反射学等といった 20 世紀の事象については、満足のいく成果をあげることができていない（身体をめぐる諸科学と芸術の関係を明らかにすることを目的とする課題(2)に関して、具体的な成果をあげることができたのは、上述のように、19 世紀後半のドストエフスキーの作品に関してである）。

４．今後の研究の推進方策
平成 23 年度は、19 世紀後半から 20 世紀初めのロシアにおける身体と表象の関係を明らかにしようとする本研究課題の最終年度であるが、これまでの研究成果を鑑みると、ひきつづき 19 世紀に比重を置き、20 世紀初めの身体と表象の関係の転換が、19 世紀後半にいかに準備されていたかを明らかにすることに努力を傾けるべきであるように思われる。
課題(1)に関しては、ドストエフスキー『カラマーゾフの兄弟』に関して、この作品において様々な形で提示される「告白」が、複数の言説制度（宗教、法、文学）のはざまで分散していることを示し、この分散がドストエフスキーにおける「小説」ジャンルの自己批評につながっていることを明らかにすることを試みる。
課題(2)に関しては、20 世紀初めに隆盛した精神分析や芸術理論そのものを分析するというよりも、19 世紀におけるその系譜をたどるために、これまで多くの心理学的・精神分析的アプローチがなされてきたドストエフスキー『カラマーゾフの兄弟』や『永遠の夫』（1870 年）を再検討する。
課題(3)に関しては、フロイト、デリダ、バフチン、ポドロガ、木村敏らの著作を、とりわけ「時間論」の観点から検討することによって、ドストエフスキーの小説にみられる特異な時間感覚を考察する。

５．代表的な研究成果
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計２件）
①番場俊「『罪と罰』の捜査担当官ポルフィーリー・ペトローヴィチ、あるいは文学と法の交錯に関する反人物論的考察」、『現代思想』第 38 巻第 4 号、286-297 頁、2010 年、査読無
②番場俊「写真からドストエフスキーへ」、『ecce――映像と批評』第 1 号、106-119 頁、2009 年、査読無

〔学会発表〕（計０件）

〔図書〕（計２件）
①編者　高木裕
著者　高木裕、ドミニク・ラバテ、先田進、エリック・ブノワ、平野幸彦、番場俊（他 5 名、10 番目）
『〈声〉とテクストの射程』知泉書館、2010 年、全 349＋7 頁
このうち「ドストエフスキーと「告白小説」のプラン」（297-323 頁）を番場俊が単独で執筆

②編者　栗原隆
著者　栗原隆、城戸淳、鈴木光太郎、鈴木正美、番場俊（他 11 名、5 番目）
『人文学の生まれるところ』東北大学出版会、2009 年、全 359 頁
このうち「表象文化論――イメージ／テクスト／身体の夢」（91-108 頁）を番場俊が単独で執筆